

## 初等体育に関する基礎的研究

—体育の授業経験とイメージを中心として—

松田泰定・東川安雄・松尾千秋・柳原英兒

(1990年11月30日 受理)

### I. 緒 言

本学部の小学校教員養成課程の学生が修得すべき体育の授業科目には、教科に関する専門科目として初等体育Ⅰおよび初等体育Ⅱ、そして教職に関する専門科目として初等体育科教育法が定められている。そしてこれらの授業は、3年生前期の第5 Semesterから4年生前期の第7 Semesterにかけて開設されている。このうち、「初等体育Ⅰ」および「初等体育Ⅱ」は選択必修科目であるため、小学校教員養成課程の学生が全員受講しているというわけではなく、例年の受講者数は定員の約半数である。

ところで、体育は小学校から大学まで必修の教科として位置づけられているが、それらの授業を通して学生は様々な経験を積み重ねてきており、それを基盤としながら専門教育としての大学の授業を受講していると考えられる。このようにとらえると、専門教育にいたるまでの学生の経験内容や、それによって形成されてきている体育に対する考え方などをできるだけ把握しておくことが、専門科目の授業内容の充実や、科目間相互の有機的な関連性を検討するうえで欠かせない条件となってくるように思われる。

これまでの指導経験を通してみると、とくに「初等体育Ⅰ」は、学生が初めて受講する体育の専門教育科目であるため、ともすれば過去の授業経験が授業の場で表出しやすいように思われる。したがって授業では、それらをいかに助長したり変容させながら、より望ましい体育の指導が追求できる学習主体としての自覚を喚起できるかどうかを授業の大切な課題の1つとなっているといってもよい。

これまで、初等体育の授業の指導内容・方法の

検討は、おもに指導後に提出させるレポートを中心に行ってきており、指導との関連からみた個々の学生からの有用な資料は得られている。しかしそれは、授業実践とそこでの資料という制約から各授業担当者のレベルにとどまり、共有できにくい側面をもっているとともに、とくに過去の授業経験との関連からみた受講者の全体的な傾向を把握するという点からみて十分に機能しにくい側面をもっているといえよう。

受講学生を対象としてなされたこれまでの研究を概観してみると、その大半が体格や体力・運動能力などの身体的な要因から検討されており、今回のような過去の授業経験やそれによって形成されている体育に対する考え方を視点として分析・検討されたものはほとんどみあたらない<sup>12)</sup>。

以上のことから本研究では、当学部における初等体育の授業の指導内容・方法等を検討するための基礎的資料を得るために、初等体育受講学生を対象として、以下の具体的な視点を設けて実態調査を行うことにした。

- 1) 現在どのような体育観を持っているかを、体育に対するイメージにより把握するとともに、そのような体育観がいつ、どのような場で形成されてきているかを検討する。
- 2) これまで、どのような体育の授業経験を積み重ねてきているかを、授業のタイプや意欲、好嫌内容などから分析するとともに、そのような授業経験が現在の体育観に影響しているかどうかを検討する。
- 3) 体育の授業がどのように目標化されていたり、初等体育の授業が位置づけられているかを体育観との関連から検討する。

## II. 研究方法

1. 調査方法：質問紙調査法を用い、初等体育 I の授業時間内に一斉に回答させ、回収した。
2. 調査時期：平成 2 年 4 月
3. 調査対象  
初等体育 I の A～D クラスの受講者 137 名（男子 49 名，女子 88 名）を対象とした。

## III. 結果と考察

### 1. 体育のイメージおよびその形成時期と場

#### 1) 体育のイメージ

授業を行ううえで、学生の実態を十分に理解しておく必要があるが、その中で最も大切だと思われるものは体育のねらいに関することがらについてであろう。ここでは、これまでの経験を通して形成されている学生の体育観を、目標との関連で抽象化されていると考えられる体育のイメージでとらえて検討することにした。

その結果は、表 1 に示すとおりである。最も高い割合がみられたのは、「運動技能づくり」のイメージを持つ者が 46.3% と約半数近くを占めていた。このことからみると体育は、技能習得との関係でとらえられる傾向が強いといえる。ついで、「体力づくり」や「レクリエーション」とする者がそれぞれ約 1/4 と多く、「規律や態度づくり」のイメージを持つ者は約 1 割と最も少なかった。また、「その他」と答えた者がいなかったことからみると、体育のイメージは、上記の 4 つに集約されているものとみてよい。

表 1 体育のイメージ

運動技能づくり	46.3%
体力づくり	25.7%
レクリエーション	21.3%
規律や態度づくり	9.6%
その他	0.0%

#### 2) 現在の体育観の形成時期および場

体育に対する自分なりの考え方をいつ、どのような場で形成してきているかを理解することは、発達における体育のみならず、運動・スポーツの

意味や価値などが内面化されやすいエポックを実態として理解できるとともに、そのような実態をもとにしながら、各発達段階における体育の授業のあり方を問い直すものともなろう。

まず、体育に対する自分なりの考え方を固めた時期についてみると（表 2 参照）、ほとんどの者が体育に対して一定の考え方をもち、そのなかでも「中学校の時」が 45.7% と最も多く、ついで「高校の時」（22.5%）となっている。大半の者がこの 2 つの時期に体育に対する考え方を決定してきているといってもよく、これは青年期の自己形成の時期とも符合している。このことは、そこでどのような価値づけがなされているかがさらに問われてくるが、この点については今回対象者数が少ないこともあって十分な分析が行えないので今後の検討課題としたい。

表 2 体育観の形成時期

① 中学校の時	45.7%
② 高校の時	22.5%
③ 小学校の時	13.8%
④ 大学の時	9.4%
⑤ ない	8.7%

ついで、体育に対する自分なりの考え方がどのような場で形成されているかについてみると（表 3 参照）、「運動部やクラブ」が 61.6% と最も多く、ついで「体育の授業」の 25.4% であった。

表 3 体育観が形成された場

① 運動部やクラブ	61.6%
② 体育の授業	25.4%
③ 運動会や球技大会	4.3%
④ 地域のスポーツ・クラブ	1.4%
⑤ その他	0.7%
⑥ 特になし	5.1%

体育の授業を通して体育観が形成されているとする者は全体の約 1/4 で、むしろ運動部やクラ

ブを通して形成されたとする者の方が多い。これは、荒井の研究<sup>3)</sup>と同様な傾向にある。このような結果の解釈はいくつもできようが、教員養成という立場からみると、体育とスポーツとどこが異なるのかを授業という視点から考え直さなければ、自分の狭いスポーツ経験だけを子どもに押しつけた体育の指導につながる危険性をはらんでいるといえないだろう。

上述の体育観の形成過程をさらに検討するために、形成の時期と場をクロスさせて集計したのが表4である。これによると、まず多様な時期と場を通して体育観が形成されていることが理解できる。また、その中でも特に「中学校の時の運動部やクラブ」がかなり高い割合（約40%）を示しており、体育観の形成にとって中学校の運動部やクラブ経験が重要な機能を果たしていることがうかがえる。ついで、「高校の運動部やクラブ」も比較的高い割合を示しており、いずれにしても運動部やクラブの影響を受けた者の割合が高い傾向が認められる。一方、「体育の授業」であるとする者の割合は、学校段階によってそれほど大きな差がみられず、約8～9%程度であった。

表4 体育観が形成された時期と場

① 中学校の運動部やクラブ	39.7%
② 高校の運動部やクラブ	11.9%
③ 高校の体育の授業	9.5%
④ 中学校の体育の授業	7.9%
④ 小学校の体育の授業	7.9%
⑥ 小学校の運動部やクラブ	7.1%
⑦ 大学の運動部やクラブ	6.3%
⑧ 大学の体育の授業	2.4%
⑨ その他	7.1%

以上、専門教育を受講するまでの学生の体育観が、いつ、どのような場で形成されてきているかについて検討してきた。大半の者が大学までに自分なりの体育観をもっており、そのような考え方を固めた時期は比較的早く、しかも体育の授業そのものによるよりも運動部やクラブの影響を強く受けてきている。このことは、すでに指摘したよ

うに、自分のスポーツ経験を中心に体育の指導を考えるとといった指導の狭さにつながる危険性をはらんでいるとともに、それが強固なものであればあるほど、専門教育として位置づけられている大学の体育の授業から自らの目を覆うことにつながるといっても過言ではないと考えられる。

## 2. 体育の授業経験やイメージによる検討

前項でみたように、体育観が形成された場が体育の授業であるとする者は約1/4であり、直接的に影響を受けたとする者の割合は決して高いとはいえない。しかしこれは、それまでの体育の授業がまったく影響を与えていないということではなかろう。ここでは、これまでに学生がどのような体育の授業を受けてきているかを把握することに加えて、これまでの体育の授業が潜在的に体育観の形成に影響しているのではないかという仮定のもとに検討を行っていくことにする。

### 1) 小・中・高における体育の授業経験

#### ① 全体的傾向

大学までに学生がどのような体育の授業を受けてきているかをみるために、4つの授業タイプを想定し、それにもとづいて小学校・中学校・高校のそれぞれについて回答を求めた。（図1参照）

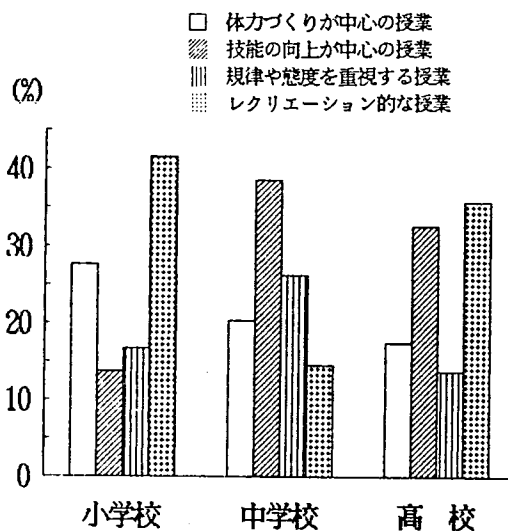


図1 小・中・高における授業経験

授業そのものが単一な目標に向けて行われているととらえること自体かなり無理があるが、ここでは学生の経験を通してみると、小・中・高の体育の授業がどのようにシンボル化されているかといった視点からのみとらえることにする。結果の概要をみると、学校段階ごとにかなり異なった傾向がみられる。すなわち、小学校ではレクリエーション的な授業が41.6%とかなり高い割合を占めており、ついで体力づくり中心の授業(27.7%)、規律や態度が重視される授業(16.8%)、技能の向上が中心の授業(13.9%)の順になっている。

しかし中学校においては、小学校とはまったく逆の傾向がみられ、技能の向上が中心の授業が38.7%と最も多く、ついで規律や態度が重視される授業(26.3%)、体力づくり中心の授業(20.4%)、レクリエーション的な授業(14.6%)となっている。

さらに高校では、レクリエーション的な授業が35.8%と、技能の向上が中心の授業の32.8%とともに大きな割合を占めており、ついで体力づくり中心の授業(17.5%)、規律や態度が重視される授業(13.9%)の順となっている。

以上のように、小・中・高のそれぞれにおける授業経験を授業のタイプにより検討したわけであるが、とくに小学校の体育がレクリエーション的な授業であったとする者の割合が最も高い。ここで問題となるのは、小学校の授業が実際にそうであったかどうかではなく、将来指導にあたるであろう学生のみからは小学校の段階の授業がどのように見えたかであり、さらにその延長線上で小学校における体育の指導が考えられているかどうかである。このような立場からみて、「レクリエーション的な授業=楽しい授業」という図式で体育の授業が安易にとらえられているとすれば、指導目標のみならず指導内容・方法ともかかわる問題となってくる。

② 授業経験と体育観との関係

小・中・高校での授業経験と現在の体育観(体育のイメージ)との関係は表5のとおりである。

経験した授業タイプと体育のイメージとの関係をクラマーの連関係数(0 ≤ C ≤ 1)により検討してみると、各学校段階とも両者の間には比較的高い関連がみられ、とくに中学校において最も高い関連を示している。すなわち、体力づくりのイ

表5 授業タイプと体育のイメージとの関係

授業のタイプ \ 体育のイメージ		体力づくり	技能づくり	規律・態度	レクリエーション
体力づくり中心	小	42.9	23.7	15.4	24.1
	中	42.9	15.3	7.7	10.3
	高	28.6	23.7	0.0	0.0
技能の向上が中心	小	5.7	16.9	0.0	24.1
	中	37.1	50.8	7.7	31.0
	高	28.6	37.3	38.5	24.1
規律や態度を重視	小	17.1	15.3	30.8	13.8
	中	11.4	27.1	61.5	24.1
	高	17.1	10.2	30.8	10.3
レクリエーション的	小	34.3	44.1	53.8	37.9
	中	8.6	6.8	23.1	34.5
	高	25.7	28.8	30.8	65.5

は最も高い%を示す。

小学校  $\chi^2=150.11$  C=0.602

中学校  $\chi^2=176.07$  C=0.652

高校  $\chi^2=162.46$  C=0.626

メージをもつ者は、小・中・高とも授業経験として体力づくり中心の授業であったとする者の割合が最も多く、レクリエーションのイメージをもつ者も同様に、そのような授業であったとする者の割合が小・中・高を通して最も高い傾向にある。また、技能づくりのイメージをもつ者の場合、中・高校でそのような授業経験をした者が最も多く、規律や態度づくりのイメージをもつ者では、中学校で61.5%とかなり高い割合を示している。

このように、体育に対するイメージと授業経験との関係を量的に分析してみると、両者の間には比較的高い関係がみられ、顕在的には運動部やクラブの影響を強く受けているものの、過去の授業経験が現在の体育に対するイメージや体育観に影

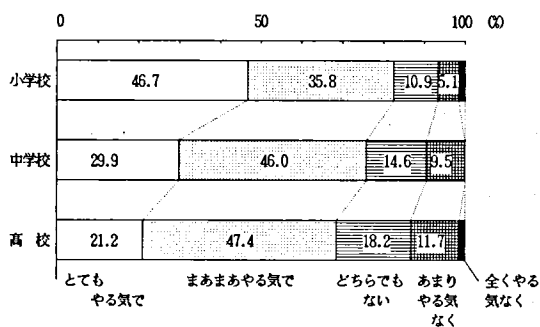
響していることがうかがえる。

2) 体育の授業での意欲

① 全体的傾向

小・中・高における体育の授業に対する意欲については、図2に示すとおりである。まず全体的な傾向についてみると、小・中・高とすすむにつれて意欲的な者の割合がしだいに減少し、意欲をもてなかったとする者の割合やどちらでもないとする者の割合が増加している。

図2 小・中・高の授業での意欲



ところで、小・中・高での体育の授業に対して意欲的であった者の割合は、「かなりやる気で」と「まあまあやる気で」をあわせてみると、小学校では82.5%、中学校では75.9%、高校では68.6%とかなり高い傾向を示している。これは、これまでに行われた調査結果〔小学校(56%)、中学校(51%)、高校(52%)〕と比較してみても、かなり高い割合を示しており、小・中・高での体育の授業において意欲的であった学生が多い傾向にあるといえる<sup>9)</sup>。これは、選択必修で受講している学生を対象者としている影響によると推測される。一方、意欲がもてなかったとする者の割合は、先の調査結果と類似しており、「あまりやる気にならない」と「まったくやる気にならない」をあわせてみると、小学校6.6%(7%)、中学校9.5%(10%)、高校13.2%(14%)とほぼ同じ割合を示している。

一般に、授業における意欲は、多様な要因が相互に絡みながら表出していると考えられるが、授業での意欲にかかわる要因を断面的にとらえてみた場合、個人のもつ身体的な能力に影響される傾

向が高いといわれている。このことから、授業での意欲と能力との関係を分析したところ(表6参照)、能力に対する自己評価が意欲に影響している傾向がみられ、とくに意欲をもてなかったとする者の約半数は自己の能力を低く評価している。これら運動場面におけるできばえを自己の能力に帰属させ、できないという殻に閉じこもったり、それに安住している者に対する働きかけは決して一律なものではないだろう。しかし、運動の科学性を基礎におきながら、なぜできないのかを問い直すことにより意識の変容を求めていくのであれば、運動実践を含めた指導を授業の基礎におく必要があるように思われる。

表6 授業への意欲と技能との関係(%)

意欲		技能		
		できる方	ふつう	できない方
やる気があった	小	58.5	14.9	26.6
	中	56.4	24.5	19.1
	高	51.1	28.7	20.2
どちらでもなかった	小	62.5	18.8	18.8
	中	68.8	25.0	12.5
	高	37.5	50.0	12.5
やる気がなかった	小	25.7	18.5	55.6
	中	40.9	9.1	50.0
	高	25.9	33.3	40.7

小学校  $\chi^2=148.36$  C=0.736  
 中学校  $\chi^2=143.57$  C=0.737  
 高校  $\chi^2=146.82$  C=0.732

このように、これまでの体育の授業に対する受講学生の意欲は意欲的な者が多い反面、意欲を持ちえなかった者も一定の割合で含まれている。とくに運動が苦手得意意欲的に授業とかかわることができなかったとする学生に対する指導も含めた授業のあり方が重要な課題となろう。

② 授業のタイプと意欲

どのような授業のときに意欲が高かったかを検討するために、小・中・高の各段階におけるそれぞれの授業タイプ別の意欲を5段階評価の評定点

から平均値を求めてみた。(図3参照)

小・中・高を通して最も高い意欲がみられたのは、レクリエーション的な授業の場合である。反対に、最も意欲が低い傾向がみられたのは、規律や態度が重視される授業の場合であり、これは小学校と高校でとくに低い値を示している。また、体力づくり中心の授業と技能づくり中心の授業はその中間の値を示している。

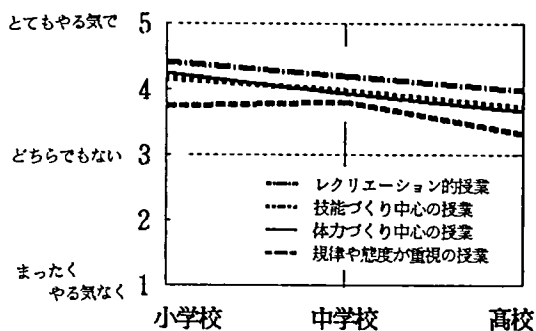


図3 授業のタイプと意欲

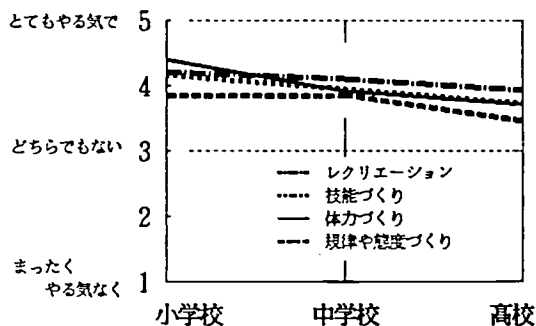
これらからは、授業の場における自発性に関することがらが問題となつてこよう。しかし、それは単に授業における態度や規律などの外発的な動機づけや、学生が根づよくもっている個々の運動のもつ誘因性などの問題をこえて、特定の教材における指導方法との関係からおさえておかなければならない問題ともつながってくるように思われる。

### ③ 体育のイメージと意欲

現在までに形成されている体育のイメージと過去の授業における意欲との関係についてみると(図4参照)、規律や態度づくりのイメージをもつ者の意欲は他のイメージをもつ者と比べて、小・中・高を通して最も意欲が低い傾向がみられる。一方、レクリエーションとする者は、相対的にみて意欲が高い傾向にあるといえる。

以上、授業のタイプおよび体育のイメージ別に意欲を分析した結果、授業をレクリエーション的にとらえた場合に意欲は高く、規律や態度づくりにとらえた場合には相対的に意欲は低い傾向がみられた。確かに意欲は、授業における重要な要因

図4 イメージ別にみた小・中・高での意欲



であるが、それが何によって喚起されるかがさらに重要である。これについては、つぎの授業での好嫌内容を含めて検討していくことにしたい。

### 3) 体育の授業の好嫌内容

これまでの授業経験を通して、どのようなところに体育の良さを感じたり、逆に抵抗を感じていたであろうか。またそれは、それぞれの学校段階で変化してきているものであろうか。

#### ① 体育の授業の好きなところ (全体)

まず、全体的な傾向をみると、小学校では好きなところとしてあげられているそれぞれの内容に対する割合はかなり分散しているが、中・高とすすむにしたがって特定の内容がかなり高い割合を示す傾向がみられる。とくに、「思いきり体を動かした時の充実感や爽快感がある」といった活動欲求の充足に関する内容は、中・高においてとも

表7 体育の授業の好きなところ (%)

内 容	小学校	中学校	高 校
できたときの感動	19.0	31.4	51.8
先生の評価	16.1	13.9	15.3
仲間とのふれあい	16.1	13.1	10.9
充実感や爽快感	13.9	12.4	6.6
友達との競争	13.1	8.0	5.8
協力して頑張る	13.1	6.6	5.8
別にない	4.4	6.6	1.5
目標の追求	2.2	5.8	1.5
先生の指導の仕方	2.2	1.5	0.7

に第一位にあげられており、またその値も急激に高くなっている。一方、「できなかったことができたときの感動がある」は、小学校では好きなところの第一位にあげられているが、これは中・高とすすむにつれて極端に少ない割合を示すようになる。また、このような傾向は、「頑張ったり、上達したところを先生が評価してくれる」といった教師の評価についても同様に認められる。また、「仲間とふれあうことができる」と「みんなで協力しあって頑張る」といった親和的な欲求に根ざした内容は、若干の変動はあるものの小・中・高を通してほぼ一定の割合を示している。

一方、「自分で目標をたてて追求できる」にみられるように、学習課題との関係で体育の授業を評価する者の割合は極めて低い。先の「できたときの感動」と合わせて解釈すると、できるようになることを目指しながら、同時にそこで何を理解させていくのか、またそれが体育の指導にとってどのような意義があるのかを新たに問い直す必要があるように思われる。これは、とすれば運動欲求の充足が支配的である体育の授業においてとくに重視して指導すべきことがらとなろう。

② 体育の授業の嫌いなところ (全体)

体育の授業でイヤだと思ったり、やりたくないと思うところとして、「思ったように上達することができない」や「競争場面が多く、能力差を感じる」といった技能習得や個人差にかかわる内容をあげている者が多い。また、「対人関係に煩わされるところ」と答えた者も、割合は低いが小・中・高としたいに多くなっている。これらの内容は、特定の教材を行ううえで必要とされる能力の水準と、そこでの学習課題や授業の場における能力差から生じてくる問題を含んでいる。学生は、それらに対して非常に敏感であるといえよう。しかし、競争にみられるように、社会的な関係から強く運動がとらえられたり、運動技能の習得において自分の課題が適切に設定できず、最終的なできばえばかりが気になったり、それから派生してくる対人関係の煩わしさを伴うような授業に対して否定的であることからみれば、より望ましい授業を志向する眼をもっていると考えられる。これらの問題が生じるその基盤には、授業における能力差とそれに対する考え方・扱い方から派生する

表 8 体育の授業の嫌いなところ (%)

内 容	小学校	中学校	高 校
別がない	37.5	24.8	27.7
上達できない	24.3	21.2	24.1
競争場面で能力差	22.1	18.2	13.9
しんどい・疲れる	5.1	11.7	13.1
思い通りに動けぬ	3.7	10.9	7.3
目標なしに動く	2.9	4.4	5.1
対人関係がイヤ	1.5	3.6	2.9
先生の指導が悪い	1.5	2.9	2.2
評価してくれない	0.7	1.5	2.2
その他	0.7	0.7	1.5

問題であろう。ひろく個人差の問題は、指導において避けて通れない問題であり、実際の指導において最も苦慮するものである。またこれは、評価と評定との関係やひいては体育における学力とは何かという研究的課題にまで発展する重要な内容にもつながるが、これらに関する基礎的な理解を深めさせていく必要があろう。

一方、「運動でしんどかった、疲れるところ」とする者は、小・中・高となるにしたがってだいに多くなっている。これは、体力的な問題も確かにあると考えられるが、むしろ授業における意欲の問題としてとらえられ、しかも外発的な動機づけからだけでは解決できない問題であり、学習内容をどのように設定するのかを中心に検討しておく必要があろう。

③ イメージ別にみた特徴

体育に対するイメージ別に体育の授業の好きなところ、嫌いなところを求め、相対的にみてとくに高い割合を示している内容を抽出したのが表 9 である。

まず、体力づくりのイメージをもつ者は、好きなところとして「充実感や爽快さ」という運動欲求の充足をあげる者の割合が高く、反対に嫌いなところとして「競争的な場面が多く、能力差を感じる」をあげる者の割合が高い。ついで、技能づくりのイメージをもつ者ではそれぞれ「できたときの感動がある」と「思ったように上達すること

表9 イメージ別にみた体育の好嫌内容の特

	イメージ別	内 容 (小/中/高)
好きなところ	体力づくり	充実感や爽快感(25.7/42.9/65.7)
	技能づくり	できた時の感動(20.3/8.5/1.7)
	規律・態度	先生の評価(15.4/23.1/7.7)
	レクリエーション	協力して頑張る(20.7/13.8/13.8)
嫌いなところ	体力づくり	競争での能力差(34.3/28.6/20.0)
	技能づくり	上達できない(30.5/22.0/15.3)
	規律・態度	疲 れ る(0.0/15.4/46.2)
	レクリエーション	別 に な い(53.6/34.5/41.4)

ができない」の割合が高く、技能の習得をめぐる内容が中心となっている。また、規律や態度のイメージをもつ者では「頑張ったり、上達したところを先生が評価してくれた」という教師の評価にかかわってくる内容をよいところとしてあげる者の割合が高い。逆に嫌いなところとしては、「運動でしんどかったり、疲れる」をあげる者の割合が高い。さらに、レクリエーションのイメージをもつ者では、「みんなで協力しあって頑張る」といった親和的な内容をよいところとしてあげる者が多く、嫌いなところについては「別れない」とする者の割合が高い傾向がみられる。

### 3) 授業と体力との関係

#### ① 授業における体力的な不安

これまでの授業で、体力的な不安をもったことがある者の割合は、表10に示すとおりである。

全体でみると、小・中・高それぞれにおいて約20%前後の者が「体力的なことから体育の授業についていけるかどうかを心配した」経験をもっている。イメージ別にみると、体力づくりのイメージをもつ者にその割合が最も高い傾向が認められ、しかも学校段階がすすむにつれてその割合は

表10 授業における体力的な不安 (%)

イメージ別	不安をもったことがある		
	小学校	中学校	高 校
体力づくり	25.7	31.5	37.2
技能づくり	22.1	20.3	15.3
規律・態度	0.0	0.0	15.4
レクリエーション	24.1	3.4	6.9
全 体	21.2	17.5	19.0

高くなっている。ついで、学校段階がすすむにつれてほしいにその割合は低くなるものの、技能づくりのイメージをもつ者に不安を感じた者が高い傾向がみられる。これらと比較して、その他のイメージでは、体力的な不安をもった者の割合は低い傾向がみられる。つまり、体力や技能といった身体面とのかかわりで体育に対するイメージをもつ者は、そうでない者と比べて授業で体力不足を感じてきた者が多い傾向にあり、そのような経験が独自の体育観の形成に機能してきているのではないかと思われる。

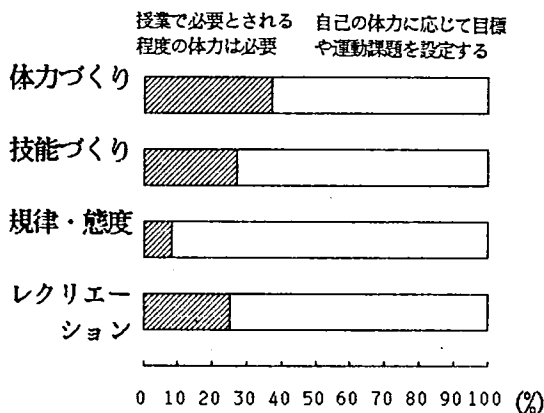


図5 授業と体力との関係



これはまた、図5にみられるように、授業における体力の位置づけ方にも影響しており、身体面とのかかわりで体育の目標をもつ者は、自己の体力に応じた目標や課題の設定に志向させにくい傾向を内在しているといえよう。

### 3. 体育の授業のあり方について

#### 1) 体育の目標

体育の授業で何を重視すべきかを、「体力づくり（体力を高めたり、身体の発達を促進する）」「技能づくり（技能を高め、生涯スポーツの基礎を育成する）」「楽しさ（運動と親しめるように、運動の楽しさを教える）」「態度づくり（頑張る心やルールを尊重する態度を育てる）」の4つの中から強く思う順に選択させて回答させた。ここでは、その1番目と2番目として答えられている内容を取り上げ、複数回答として処理した。(表11参照)

体育の授業で重視したい目標を全体でみると、「楽しさ」をあげる者が極めて高い割合を示している。また、体育に対するイメージ別にみても、「楽しさ」はすべてのイメージで最も高い割合を示しているが、なかでもレクリエーションのイメージをもつ者ととくに高い割合を示す傾向がみられる。ついで、全体でみると「態度づくり」が高い割合を示しているが、これはとくに規律や態度の

表11 体育で重視すべき目標

目標 イメージ	体力 づくり	技能 づくり	楽しさ	態度 づくり
体力づくり	53.3	2.9	91.4	51.4
技能づくり	38.6	15.8	86.4	59.6
規律・態度	15.4	7.7	96.4	76.9
レクリエーション	31.0	13.8	100.0	55.2
全体	38.5	11.1	91.8	58.6

(表内の数字は%で、1番目と2番目の合計)

$$\chi^2=277.66 \quad C=0.588$$

イメージをもつ者が他と比較して高い割合を示す傾向がみられる。さらに、「体力づくり」がついで高い割合を示しているが、とくに体力づくりのイメージをもつ者が他と比較して高い割合を示している。最後に「技能づくり」は、目標の中で最も低い値を示しているが、体育のイメージとの関係からみると、技能づくりのイメージをもつ者が僅かではあるが高い傾向にある。

以上のように、体育で何を重視して指導するかは、全体でみると「楽しさ」が圧倒的に多く、ついで、「態度づくり」「体力づくり」「技能づくり」の順となっている。また、このような目標化に対しては、体育をどのようにとらえているかといった体育観が関係しており、それぞれの体育観により重視する重みは異なる傾向がみられる。

#### 2) 初等体育の受講理由

教科専門としての初等体育の授業の受講理由をみると(表12参照)、全体では、「体育が好きだから」が最も多く、ついで「指導法を学ぶため」「体力の維持・増進のため」「実技力を向上させたいから」の順となっており、体育に対する好意的態度を基盤としたり、体力づくりの一環として受講している者が、指導を視野において受講している者よりも多い結果となっている。また、この結果は、体育に対するイメージごとにかなり異なっ

表12 初等体育の受講理由 (%)

受講の理由 体育のイメージ	体 育 だ が か 好 ら	指 導 法 を め	体 力 ・ 増 進	実 技 上 の	そ の 他
体力づくり	17.1	48.6	25.7	0.0	8.6
技能づくり	30.5	32.2	22.0	3.4	11.9
規律・態度	30.8	30.8	30.8	0.0	7.7
レクリエーション	62.1	6.9	20.7	0.0	10.3
全体	33.6	30.7	23.4	1.5	10.9

た傾向がみられる。すなわち、「体育が好きだから」は、レクリエーションのイメージをもつ者にとくに多く(62.1%)、「指導法を学ぶため」は、体力づくりのイメージをもつ者に多い(48.6%)傾向がみられる。

このような結果からみると、これまでの授業経験を通して形成されている自己を中心とした体育の授業や運動とのかかわり方を、いかに指導する立場からとらえ直させていくかが当面の授業における課題となっているのではないと思われる。

#### IV. 要 約

本研究は、当学部における体育授業の指導内容・方法等を検討するために、初等体育受講学生を対象として体育観や体育の授業経験を中心とする実態調査を行った。その結果、以下のことが明らかになった。

- 1) ほとんどの学生がすでに自分なりの体育観をもっており、それらをイメージとの関連でとらえると、技能づくり、体力づくり、レクリエーション、規律や態度づくりの順であった。
- 2) そのような体育観は、中学校を中心とした比較的早い時期に、運動部やクラブを通して形成されてきている傾向がみられた。
- 3) 体育の授業との関係から体育観をみると、これまでに受けてきた小学校、中学校、高校の体育の授業の影響を潜在的に受けており、とくにこの傾向は、体育の授業を体力づくりやレクリエーションととらえている学生に強くみられた。
- 4) 受講者のこれまでの体育の授業に対する意欲は、高い者が多い反面、意欲をもちえないまま授業を経験してきている者も含まれており、意欲において階層化している傾向がみられた。
- 5) 体育の授業の好嫌内容は、学校段階によって異なり、学校段階がすすむにつれて運動欲求や親和欲求に根ざした内容を体育のよさとしてあげる傾向がみられる反面、技能習得や体力的な内容、さらには能力差にかかわる内容が授業での抵抗として比較的多くあげられる傾向がみられた。また、これらは、体育観によって異なるという特徴もみられた。
- 6) これまでの授業において約20%の者が体力的な不安を感じた経験をもっており、とくに身体的側面とのかかわりで体育のイメージをもつ者

に不安をもつ者が多い傾向がみられた。

- 7) 体育のねらいについては、運動の楽しさが最も多く、ついで態度の育成、体力の向上、技能づくりの順であり、その順序は体育観別にみてもほぼ同じ傾向がみられたが、ウエイトのかけ方は体育観により異なる傾向がみられた。
- 8) 教科専門である初等体育の授業の受講理由をみると、体育に対する好意的態度から受講している者や体力づくりの一環として受講している者がかなりの割合を占めており、指導法の習得や実技力の向上を目ざして受講している者よりも多い傾向がみられた。

以上のように、学生の体育観の形成やその背景としての過去の授業経験や、それから派生してくる体育の授業のあり方をめぐっていくつかの問題点が指摘できた。とくに体育観やそれをもとにした授業のあり方については、授業でその認識をいかに変容させていくかが問われているといってもよい。しかしこれは、授業を指導目的や内容・方法から検討できる力量やその育成と密接に関連した問題でもある。このことから、今後さらに指導内容や方法等に関する経験や理解、および授業を通じたその変容などを中心に検討を加えていく必要があるように思われる。

#### 参考・引用文献

- 1) 谷村辰己編「体育学研究文献目録(第一巻)」不昧堂出版、1970年。
- 2) 谷村辰己編「体育学研究文献目録(第二巻)」不昧堂出版、1975年。
- 3) 荒井貞光「スポーツを好きになる〈場〉の実証的研究」広島大学総合科学部紀要VI、保健体育学研究第3巻、1986年。
- 4) 東川安雄・松田泰定「体育授業に関する基礎的研究(I)―学習意欲と他の関連する諸条件との関係の分析を中心に―」広島大学学校教育学部紀要、第II部第7巻、1984年。
- 5) 岩原信九郎「新しい教育・心理統計 ノンパラメトリック法」日本文化科学社、昭和48年。